

つむる つながる

新大宮商店街と周辺地域のひとたちの「めをつむる」写真展



2018 2/13 tue → 2/24 sat

新大宮商店街事務所

目次

- 01 ごあいさつ
- 02 めをつむる写真展「つむるつながる」に寄せて
- 03 あゆみ
- 04 つむるつながる座談会
- 08 めをつむるショートストーリー
- 09 めをつむるポートレート
- 10 メッセージ
- 12 パブリシティ



ごあいさつ

このたび、京都府「商店街アイデア実現プロジェクト事業」の助成により、めをつむる写真展「つむるつながる」を開催する運びとなりました。

京都市山科区と静岡市で実施してきた写真展の今度の舞台は、京都市北区の新大宮商店街です。ここにうつっているのは、年齢、性別、国籍、障害の有無を超えて、新大宮商店街やその周辺地域に住む、あるいはゆかりのある525名の人たち。商店街を舞台に、多様な人たちが共にめをつむります。

めをつむると、普段見られない表情がうつし出されます。その表情を眺めると、新たな見方に気づいたり、自分自身や他者との距離を縮めることができるでしょう。

さらに、めをつむることは自分自身の心にめを向けることや、他者との寛容的な関わりをも意味します。そこからイメージされることも様々です。

これらの写真は主催者で撮影したものだけではなく、即席フォトスタジオ「めをつむるスタジオ」を商店街や周辺地域の各所に設置し、参加者が自由にモデルやカメラマンとなり撮影した写真も含まれます。ここでは、様々な境界の無い関わりが生まれました。

本展を通じて、見えない「人と人のつながり」や「こころのつながり」が、ここから生まれることを願っています。

最後になりましたが、本展の開催にあたり、ご参加頂いた皆様、そして多大なるご協力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

2018年3月

ヴァリアス・コネクションズ

代表 成実 憲一

めをつむる写真展「つむるつながる」に寄せて

めをつむる写真展「つむるつながる」の御開催を、心からお祝い申し上げます。

開催に御尽力された成実憲一代表はじめ「ヴァリアス・コネクションズ」の皆様、改めて深く敬意を表します。

「互いに『目をつむり合う』という寛容な心。この写真展を通じて、多様な価値観が尊重することの大切さを感じて欲しい——」。成実憲一代表の想いを伺った時、私も大いに共感しました。

成実代表は、区役所にもお越しになり、区職員の表情も撮影されたほか、鳳徳学区ビジョン策定に当たっては、住民の皆様がお集まりになる会合にも御参加いただくなど、様々な場面でお世話になっております。日頃の御尽力に、改めて感謝申し上げます。

写真展の開催早々、私も北区・新大宮商店街の会場へ。343枚、525名の方々の穏やかな表情を拝見し、ありのままの姿を切り取った一枚一枚が放つ力を、大いに感じました。

写真展を通じて届けられる、人と人、人と社会の繋がりの大切さ。向こう三軒両隣、ご近所同士の緩やかなつながりの重要性が改めて指摘されている昨今、北区役所でも、地域の皆様の御意見を伺いながら、地域コミュニティの活性化に向けて様々な取組を進めています。貴団体をはじめ地域の皆様のお志高いお取組の積み重ねが、やがて大きな力となって、住みよい北区のまちづくりに繋がっていく。私はそう確信しています。引き続き、北区のまちづくりにお力添えを賜りますよう、お願い申し上げます。

結びに、「ヴァリアス・コネクションズ」の皆様の理念が、北区、ひいては京都市全体に大きく広がること、関係者の皆様の一層の御活躍を心から祈念いたします。

平成30年3月
北区長 松本 和加子



2017年

- 10月20日 プロジェクト始動／大谷大学慶間館
- 10月28日 撮影スタート／新大宮商店街
- 10月29日 「ロールモデル研究」で本展を紹介／京都造形芸術大学
- 11月6日 撮影／新大宮商店街と周辺地域
- 11月11日 撮影／新大宮商店街と周辺地域
- 11月18日 撮影：鳳徳学区まちづくりビジョン策定ワークショップ／鳳徳会館
- 11月25日 撮影／新大宮商店街と周辺地域
関係者でプレ「めをつむるスタジオ」を実施／新大宮商店街事務所
撮影：ラジオミックス京都「秋の交流会」／TAMARIBA
- 12月2日 撮影／新大宮商店街と周辺地域
- 12月5日 「めをつむるスタジオ」／京都市紫野障害者授産所
- 12月9日 撮影／新大宮商店街と周辺地域
- 12月10日 撮影／新大宮商店街と周辺地域
- 12月16日 「めをつむるスタジオ」／新大宮商店街事務所
- 12月17日 撮影：「ほうとく寄席」／鳳徳会館
- 12月21日 「めをつむるスタジオ」／北区役所 区民交流スペース
- 12月22日 「FM87.0 RADIO MIX KYOTO あべきた放送局」に出演
- 12月23日 「めをつむるスタジオ」／新大宮商店街事務所
- 12月24日 撮影：「ぜんざいふるまい」／サンケイデザイン



2018年

- 1月1日 撮影／今宮神社
- 1月3日 撮影／新大宮商店街と周辺地域
- 1月6日 撮影／今宮神社～新大宮商店街
- 1月13日 撮影：「たつのおもちゃライブラリー」／玉林院
- 1月14日 「めをつむる“おみくじ”スタジオ × 高齢者福祉施設紫野」／そらいろちルドレン
- 1月20日 撮影：「子供インターンシップ 鳳徳小学校・待鳳小学校」／新大宮商店街
- 1月21日 展示：DJイベント「音家」にて約70枚の画像をスライドショー投影／新大宮商店街
- 1月28日 撮影／新大宮商店街
- 2月3日 リビング京都新聞にて本展を紹介
- 2月10日 ショートストーリー収録／佛光大学放送局
- 2月11日 最終撮影／新大宮商店街
- 2月13日 「つむるつながる」展 スタート
「FM87.0 RADIO MIX KYOTO KYOTO RIVERSIDE WALK 火曜日」に出演
- 2月17日 京都新聞朝刊にて本展を紹介
- 2月22日 「FM87.0 RADIO MIX KYOTO KYOTO RIVERSIDE WALK 火曜日」に出演
- 2月24日 朝日新聞朝刊にて本展を紹介
「つむるつながる」展 終了



つむるつながる座談会

「つむるつながる」を内から聴いたり、上から眺めたり……。写真展にかかわった4人で、いろんな角度から話してみました。ここだけのおもしろエピソードから「つむるつながる」に込められた想いまで、おたのしみください♪



つながりの種

— みなさん、それぞれが不思議なご縁があって、今日ここに集まりましたよね？

宇野 私の職場の写真サークルに、成実さんが講師で来てくださったことがあって。

成実 「誰でもカメラ部」でした。お互いのポートレートを撮りあいましたね。

宇野 その時から、成実さんが何かするときにはお礼をしないとって思ってた。まさか、プロジェクトに入るとは思ってませんでしたけど(笑)。

成実 2017年10月、プロジェクトのスタートとして、ステキな方々にお集まりいただきました。

宇野 もうその時に、ただ見に行くだけの写真展にはしないっていうコンセプトを共有できてましたね。そこで、こんなことやあんなことできたらと、みんなで夢を語れたのがいい時間でした。

— 放送局長なりたてほやほやの木村さんとは、また別ルートからのご縁だったんですね。

木村 ちょうど、新大宮商店街さんと RADIO MIX KYOTOでプロジェクトを企画していたんです。その時に、商店街の中村理事長からご紹介いただきました。

成実 ほんとうに中村理事長がいろいろ動いてくださって、そこからの出会いがたくさんありました。

木村 「めをつむる」ということにフォーカスされた感覚が、わたし的に、これちょっとすごいかなんて思いました。実際にかかわって、この企画も成実さんも印象通りステキでした(笑)。

— 昔からの友人っぽいですが、森さんと成実さんも、今回はじめて出会われたんですね？

森 同じ法人の知人から、「今日会った人でオモシロイ人いるから紹介したい」という連絡があって。

成実 ほんとに、ひよんなきっかけでしたね。私はその方に宇野さんを紹介したり。

森 お話を聞かせていただいて、びっくりしたことがあって。“つむる”とは逆の、介護スタッフの“まなざし”に焦点をあてた写真展をやったことがあって、なんか呼び合うものを感じました。

成実 意気投合して、すぐに「めをつむるスタジオ(*①)」に紫野のご利用者さんとスタッフで来てくださることになったんですが……(笑)

森 ほんと、すいませんっ。まさか紫野のインフルエンザ第一号になって、私だけが不参加になるとは思ってもいませんでした。

一同 (笑)

— 実は、15年以上前からお互いのことは知っていたんですが、成実さんとうやうやってなにかご一緒させていただくのは初めてなんです。

成実 私たちは静岡大学出身なんですが、年が少し離れているので、学生生活は重なってないんです。でも、私が初めて個展をした静岡のギャラリーsensenciのオーナーと小西さんもつながっていて。

— そして時を経て、たまたま京都で、たまたま福祉関係の仕事にお互いが就いていて……。

成実 そういえば、たまたまご紹介いただいた鳳徳学区のビジョン会議に参加させていただいたのをきっかけに、今回の写真展が一気に広がっていきました。

— どこで、どんなつながりの種がまかれていて、どんな芽が出るのかわからないですよ。

めをつむるスタジオ

— これまで2回写真展をされてますけど、今回は新しい試みもたくさんあったんですね？

成実 小西さんとは膨大な長文メールのやり取りをしましたね。こんなことは？ あんなことは？ これは実現不可能だけど、あれならいける！ みたいな、やりとりから「めをつむるスタジオ」が生まれました。

宇野 高齢の方の施設「きたおおじ」さんから、皆さんで来てくださったことがありました。ご利用者さんは支援者と来るわけだけど、写真を撮りあいつこすることで、利用者と支援者の関係は変わりますよね。

森 少なくとも、そのときは、支援する側、される側の関係性はなくなってますよね。

成実 普段知っている方同士が撮りあうことで、私が撮るときとはまた違った表情が写し出されていたように思います。

宇野 その人らしい、“素(す)”の表情なんでしょうね。



―― 展示期間中も置いていたんですが、紫野さんが来られたスタジオでは「めをつむるおみくじ(*②)」もしました。

成実 写真を撮りあいつくする前に、こっちで用意したおみくじをひいてもらいます。そこには「大切な人を想って」とか“肩を組んで”めをつむれば大吉」と書いてあって、その通りにさせているところをパシャリ。

森 そんな企画もあったんですね。実際に写真を見させていたでいて、なぜこんな表情をされているのか、わかったような気がします。

宇野 きっと、そこでの幸せな雰囲気や想いが写りこんでいるんでしょうね。

魔法のアイテム

―― 「めをつむるスタジオ」には他にもいろんなエピソードがありましたね。

成実 大正15年生まれの91歳のご婦人が、平成7年生まれの青年を撮影するっていう場面もあったなあ。偶然通りかかったこのお二人の歳の差は、なんと70歳！

一同 おお！！

宇野 特に一眼レフカメラとかに触れたことがない人が、写真を撮る姿も印象に残ってますね。

成実 あるおばあちゃんに「めをつむってください」と言って写真を取ろうとしても、なかなかつむれなくて……。だけど、そのおばあちゃんが撮る側になってシャッターを押すときには、なんと、めをつむっておられたんです。その場にいた全員が「つむれるじゃないですか〜！！」って、つっこんじゃいました(笑)。



森 「さあ、コミュニケーションしてください」って言われても、なかなかすぐにできないですね。けど、そこにカメラがあることでコミュニケーションが生まれる魔法のアイテムみたいですね。

写真の物語を聴く

―― めをつむる写真って、見れば見るほどその人の物語が奥にひそんでいるような気がして……。それを、ほんの一部でいいから物語の力を借りて共有できたらと思ってショートストーリーも書かせていただきました。

森 そもそも、計画段階からショートストーリーはあったんですか？

成実 もちろん、ありませんでした(笑)。これまた、小西さんとのやりとりから生まれました。ショートストーリーの音声収録にいたっては、木村さんに展覧会3日前に無茶振りなご相談をしまして……。

木村 無茶振りとは思ってませんでしたよ(笑)。私は佛教大学放送局の学生さんたちにつないでいただけで……。きっと、学外の方からそんな依頼をいただけたのはうれしかったんじゃないかなあ。

―― 収録の現場に伺ったとき、すでに原稿にびっしり線が引かれていたり、その場面の情景をいろいろ質問されたりして、熱心に感動しました。

木村 収録方法とかはあえて何も言ってなくて、自分たちで表現や収録の仕方をすべて考えてくれていましたし、貴重な機会だったのではないかと思います。



●佛教大学放送局による「めをつむるショートストーリー」の朗読。
『聴く写真展があっても、いいんじゃない!?』をテーマに、文字や日本語を讀んだり話したりするのが苦手な方、写真が見えない(見にくい)方のために、「めをつむるショートストーリー」の朗読音声を会場に設置。

【収録】2018年2月10日(土)

佛教大学放送局：前川 純之介(前編朗読)

野原 麻由(後編朗読)

在原 佑紀(ミキサー)

佐藤 我間(ディレクター)



成実 今回撮影させていただいた方の一人に、光島さんという美術家でもあり視覚障害者でもある方がおられて、展覧会にも来てくださったんです。

―― 企画段階から、「めをつむる」ことと「みえない」ことや、見るだけではない写真展のあり方について議論が続いています。

成実 その議論の中で、この朗読が生まれました。

宇野 展示準備のとき、朗読を聴きながら、5時間かけて写真を虫ピンで打ってたんです。

成実 343枚もの写真を、ありがとうございました！

宇野 1枚1枚の写真を見つめながら作業をしていると、その1枚1枚にその人らしさが写し出されてるように思えてきて……。たとえば、和菓子屋さんは真面目な表情で、唐揚げ屋さんにはここに顔で……。そんなことをおしゃべりしながらできた時間は、すっごく楽しかった。

成実 今回の写真展で朗読を聴くことができたり、木村さんにラジオでも取り上げてもらったりしたことは、次につながりそうな気がしています。

写真展と日々の暮らし

―― ラジオという“聴く”こと中心のお仕事からは、今回の写真展はどう映ってましたか？

木村 コミュニティFM放送局として、どんな放送を流すのかというよりも、誰かと誰かをつないだり、地域の埋もれてしまっている良いものを再発見したり、そういう間をとりもつことが私の仕事だと思っているんです。

成実 わかります。我々も写真展を開催することがを目的としてやってるわけじゃないですよね。

宇野 私もラジオ、やっていたんです。精神障害のある人といっしょに商店街を取材したりして……。

木村 そうだったんですね。

宇野 どんな内容を発信するかという以前に、自分たちが動き始めることや、発信しようとする事自体を大切にしていました。



木村 放送することだけが目的だったら、これまでも生まれてこなかったつながりもいっぱいあったと思います。今回の写真展はプロセスも含めてほんとうに良いプロジェクトだと思っていて、伝えたい！ という使命感みたいなものがありました。

―― この写真展もラジオも共通点があって、見ること聴くことがゴールじゃないんですね。

森 どんどん変わっていくというか、ライブ感が伝わってきてます。

成実 我々の生活も同じじゃないですか。日々、いろんなことがあって、いろんな人と出会って暮らしている。そうやって自分が築かれていくのと同じように、その過程で写真展も変わっていく。

木村 ラジオも写真展も、番組を放送したり写真を展示したりする非日常みたいなところが目的ではなくって、その過程のつながりや日常を大切にしたいなって思ってるんですね。

つむるから、つながるへ

―― 皆さんにとっての「つむるつながる」って何ですか？

宇野 私のめをつむった写真を見たある人が「宇野さんらしいね」って言われたんです。どこが？(笑) っていう気持ちがある反面、そうなのかもと……。

森 自分らしさって、なかなかわからないですよね。

宇野 写真うつりがいい人って、いるじゃないですか。そういう人って自分がどう見られているかを、わかっていると思うんです。だけど、めをつむる写真ではそれができない。だからこそ、自分もわからない自分らしさを写し出しているのかなと思って……。

森 私は GAM(Grand Art Museum) という、期間限定で高齢者福祉施設を地域に開かれたミュージアムにするという企画をやっています。作品も人も、どこの誰がということじゃなくて誰でもフラットにいられる場が大切なんだと、壁一面の写真を見て改めて思いました。

木村 今回、ほんとうに勉強になりました。これまでの経過って、人と人がつながっていったり、新しい関係性を紡ぎなおしたり、いろんなことに応用できると思ってるんですね。今後に活かしていきたいです。

宇野 「つむるつながる」というタイトルにあるように、イベントだけのつながりではなくって、つながり続ける、深いところをつながるっていうのかな……。仕事だけでは出会えないような方々に出会えて、巻き込んでもらえてよかったなって。それに乗かっていけた自分もよかったし、そういうことを通して自分が変わっていくのかなって思いました。





ああ、たのしかったね

— じゃあ、さいごに。「つむるつながる」の先には何があるんでしょう？

森 福祉もアートも、行きつく先は世界平和なんじゃないかって思うんです。めをつむった職場の人たちの写真を撮ってもらえたら、お互いにやさしくなれたり、すていい職場になれたり、そこから広がって世界平和に近づいていくような……。

木村 これを機に、「めをつむる家族写真」「めをつむる職場写真」なんてどうですか。いろんなしながらみやわだかまりも、一瞬でときほぐされたりして。

成実 おっ、次なるヒントが生まれた！ 私がいて、家族がいて、家族が住む地域や社会があって……私たちがこれからも住み続けたい地域や社会を作りたいなって、シンプルに考えています。いろんな人とかかわりながら自分が日々かたちづくられているし、今やることもどんどん変わっていく。それと同じように、私ができることが誰かのかかわりに重なって「ああ、たのしかったね」なんて、一緒に言えたらいいなあ。

木村 その積み重ねが明日につながるんですね。

宇野 その時だけじゃなくて、じわじわ来る「たのしかったね」ですね。

成実 さいご、小西さんはどうでした？

— 今回のプロジェクトにかかわらせていただいて、ずーっと「ああ、たのしいなあ」って思ってます。それは、比喩的な表現も含めて「めをつむる」からこそ共有できる感覚や世界があって、そこで見知らぬ自分や他者の一面に出会い続けていくことができるからなんだと思います。そんな、たのしい毎日を、これからも過ごしていきたいですね。



①「めをつむるスタジオ」

新大宮商店街や周辺地域の各所に即席フォトスタジオ「めをつむるスタジオ」を設置。カメラマンもモデルも、そこにいた人たち。買い物帰りの大正生まれのご婦人が、遊びに出かける平成生まれの青年の写真を。カメラマン志望のカワイイ男の子が、アップ NG のお母さんの写真を。近隣施設を利用されている方が、ご友人やそこで働く方の写真を。「めをつむるスタジオ」では、そんな「撮りあいっこ」が繰り広げられた。

②「めをつむるおみくじ」

「めをつむるスタジオ」や写真展会場に、大吉しか出ない「めをつむるおみくじ」を設置。ただ、どんな状況で、どんなことを想ってめをつむるのは指定されている。たとえば「昔を思い出して、めをつむれば大吉」や「朝、玄関の前で、めをつむれば大吉」など。誰かが書いたおみくじが自分に届き、自分が書いたおみくじが誰かに届く。そしてその誰かが、誰かを想っておみくじを書く……。そんな「めをつむる」にちなんだ大吉の数珠つなぎが繰り広げられた。

プロフィール



宇野 基子(うの もとこ)

「就労支援センターそらいろ」サービス管理責任者。大阪生まれ。精神障害のあるひとたちの就労支援をおこなうとともに、写真サークルを作ったり、ラジオ番組を作ったりするなど、働くことのみならず生きがいや楽しみを見つける活動もおこなう。



木村 博美(きむら ひろみ)

FM87.0 RADIO MIX KYOTO放送局長。千葉県柏市生まれ。東京を中心に音楽活動、タレント業を経て、東京から京都へ移住。FM87.0 RADIO MIX KYOTOの立ち上げからラジオパーソナリティ、制作ディレクターとして携わり、2018年3月より放送局長に就任。



森 賢一(もり けんいち)

高齢者福祉施設紫野総務兼介護部長。兵庫県明石市生まれ。大阪芸術大学舞台芸術学部卒。「GAM(グランドアートミュージアム)」という施設と地域と一緒に楽しめるアートイベントや「愛の傘下」という介護職の眼差しをコンセプトにした写真展を企画するなど、アートと福祉を融合した活動を展開。



成実 憲一(なるみ けんいち)

ヴァリアス・コネクションズ代表。京都市生まれ。静岡大学教育学部卒。現代美術の作家活動をおこないながら、障害者福祉の世界へ。障害のあるひとたちの作品を発表するアートギャラリーを開設したり、展覧会を企画する。2015年よりめをつむる写真展「つむるつながる」を開催。



ナビゲーター：小西 秀和(こにし ひでかず)

社会福祉法人西陣会勤務。神戸生まれ。静岡大学人文学部卒。在学中から表現活動や文学、福祉、芸術、哲学など、興味は浅く広く、最近は特にスパイスカレーにはまっている。「つむるつながる」では、企画からかわかり、「めをつむるショートストーリー」や「めをつむるおみくじ」を発売。

めをつむるショートストーリー 文：小西 秀和

前編「つむる」

はあ……。

夕食中、思わずため息がもれてしまい、自分でもびっくりする。日曜日しか一緒にとれない夕食の時間を楽しく過ごせたら、そう思っても自分から会話が續かない。

「パパ～、クイズですよ～」と、娘の突然の言葉に救われる。

「お、どんなクイズ？ 楽しみ」

「このまえ、パパが、めをつむったのは、いつでしょうか？」

子どものひっかけ問題だから“まばたき”しているからとかの理由で、きつと“いま”が正解なんだろう。しかし、いきなり正解してしまってもつまらない。

「う～ん、難しいなあ……」と言いながらも、どう間違えるか頭を回転させてみる。

「答えは、朝。起きる時まで、めをつむってたから」と、目をパチパチさせて答えてみる。

「ブーーーーッ！」と、娘の嬉しそうな顔。

「え～～～っ」と、不服そうにする私。

「こたえは、いま、でした～！！」

気がつくと、リビングは私一人だった。

娘とお風呂に入る約束をしていたのに、食後の食器洗いをやろうと思っていたのに、娘を寝かしつけた後には夫婦の会話をとっていたのに……、時計の針は真上を指しており、また新しい週が始まってしまっていた。

顧客のために、後輩のために、会社のために。経験を重ねるにつれて視野も広がり、もっとこうすれば良くなるはずと信じて働いているつもりだが、この数年は目に見えた成果も出ていない。やりたいことよりも、やらなければならない ToDoリストだけがが増えていく。いろんなことが目につき、良かれと思ってやったことが裏目に出てしまう……、そんな1週間がリピートされるのが憂鬱だった。

真夜中のコーヒーマシンも、中年になった自分の姿も、悲劇のヒロインみたいだ。これからの自分の人生は？ 会社の行く末は？ 家族の生活は？ 未来は？ 答えのない漠然とした問いばかりが生まれては消えていく。

こんどは「ママ～、ママがいい～」と、顔をくちゃくちゃにして泣く娘の姿が浮かんできた。ちょっとしたことなのに、声を荒げて怒ってしまった今朝の自分を責める。次々に、どうしようもないことばかりが浮かんで消えていく。

誰も助けに来てくれるわけではないのに、自分は誰かを、何かを、待っているのだろうか？

「めをつむったのは、いつでしょうか？」

こんな夜中に起きてはいるはずはないと思いつつも、部屋を見渡す。気のせいだったが、ワラをもつかむ気持ちで、まぶたをとじてみた。

ふうふう……。

ゆっくり息を吐き出し呼吸に集中しながら、変えられない過去も、手の届かない未来も、許せない自分も、うまくいかない他者との関係も、あたたかい闇と光がまざったやさしい景色の中に溶けていくようだ。トゲトゲした心がまあるくなっていくのがわかる。いろんなことも、自分のことも、やさしくつつみこんで受け入れられる気がする。

そうか！ ほんとうに答えは“いま”だったんだ。

いま、めをつむれば、よかったんだ。

めをつむることは、日々を生きていくこと。

父としても夫としても、人間としても未熟な私に、娘の元気な声がかみわたり、あたたかいものが頬をつたう。

「こたえは、いま、でした～！！」

後編「つながる」

めずらしく夜中に目を覚ます。

リビングに行くと、めをつむったまま涙を流しているかと思えば、こんどは微笑んで……こんな深夜に何やってんのと呆れながら、再び布団にもどることにした。

はあ……。

やっぱり、起きてこない。予想はしてたけど。朝食、洗濯、娘の送り出しを同時並行にこなしながら、ひと息つく間もなく仕事に向かう。

あたりまえのことだけど、仕事中は仕事にだけ集中すればいい。娘や旦那のような不確定要素のかたまりの家庭よりも、仕事の方がいくら自分のペースで進めることができるし、いろんなことも割り切れる。

そんな仕事もタイムリミット。夕食のメニューを考えなければ。野菜は高いけど栄養のバランスも必要だし、娘の昼ごはんのメニューは何だったかな、今日の特売品は……いろんな条件をクリアして買い物すまし、自転車にまたがる。今週も始まったばかり、まいにちを乗り越えていくのが精一杯だけど、がんばれわたし！と重いペダルをふみこんだ。いつもの商店街を疾走していると、視界の片隅になにかが飛びこんできた。足はペダルをこいだまま、頭がわたしを呼び止める。

ん？ つむる？ 写真？

意識が追いついて、足がようやくとまり、ちょっとだけならと、来た道を引き返す。

あっ！！！！？ 息がとまる。

おびたしい数のモノクロ写真が……しかも、全員がああ表情で。なにこれ？ わたしが知らないだけで、流行ってるの？ もしかして、あの人も写ってるのだろうか……。すうーっと、深く息を吸い込んでから、いちまい一枚、目をうつす。

ひとり、ひとり、おなじ、ちがう、ちがう、おなじ、おなじ……

あのひと、わたしの、まぶたが、かさなる。

どうして？ この写真から目が離せないんだろう。ずっと見ていたいけど、タイムオーバー。もう帰らないと。

わたしは自転車とおなじ。

朝起きて、朝食、洗濯、準備、仕事、買い物、夕食、片付け、入浴、就寝……ゆくりなんてしてられない。立ち止まれば、次に進めなくなってしまう。力をふりしぼって外を見る。思いっきりペダルをこいだ。

「そういえば、ママ、おみくじひいたんだよ」

二人だけのいつもの食事が終わってから、写真展にあったおみくじのことを思い出す。

「ママだけいいな、いいな～。はつもうで？」

「初詣みたいに、みんなめをつむってたんだよ」

「へんなの。おみくじみせて～」

膝の上で、はやく早くとせかす娘が、まだあけていないおみくじのテープをはがす。

「なんてかいてあるの～??」

きょうは、なんかいい息がとまるんだろう。

「ね～ね～、ママ～」

「……」

ぎゅうっと、か細い腕に抱きしめてもらうのは初めてかもしれない。

ふいに、あの写真がまぶたの奥に浮かぶ。

一人でペダルをこぎ続けなくても大丈夫、立ち止まっても大丈夫、あしたも大丈夫。あのひとも、わたしとおなじ、ひとりじゃない。

めをつむりながら、あたたかさにつつまれていくのがわかった。

「おみくじにはねえ、“大切な人の前でめをつむると大吉”って書いてあるんだよ」



メッセージ

「めをつむる」が教えてくれたこと

「今度、組合事務所でこんな写真展するよ」と、新大宮商店街の中村理事長に紹介いただいたのが2017年の秋口。「め、目をつむる写真展ですか!？」と斬新なコンセプトに驚き、どんなメッセージがあるのだろうかに興味を持ちました。その後、縁あって私も被写体になる機会があり、目を閉じて写真を撮られる無防備さにドキリとし、目をつむるという行為について改めて考えさせられました。

写真展の設えは、当然といえば当然なのですが、写真展で現代アートの空間。しかしここに至る一連のプロセスを理解した上で見る写真展は、表層の顔がたくさん写る写真というだけでなくその奥にある出会いやご縁や交流の結果であり、それが可視化されたものに見えました。無防備な姿が並ぶその写真たちは、言葉ほどに物を言う目が閉ざされており、なんだか安心して眺めることができ、普段、いかに人の目を気にして暮らしているのだと自分に失笑しました。

「目をつむる」は相手のミスなどに対して寛容を表すメタファーでもあります。現代アートは押し付けではない気づきの問題提起だと思いますが、「つむるつながる」は現代アート展として不寛容社会に対する問題提起であり、そしてつながりながらお互いを認め合う一連の活動であると感じました。

大島 祥子 / スーク創生事務所 代表

つむるとはまぶたを閉じること

「つむる」と言うと見て見ないふりをするとか閉鎖的などという悪い意味もあるようだ。目を閉じて写真を撮ることには、見えない人からの反発もあるとも聞いた。

ではぼくはどうかというと、これまで写真を撮ってもらう時にとでも緊張していた覚えがある。だが、今回成実さんにカメラを向けられた時は、ごく自然に振る舞えたと思う。いつもは、うつむきすぎていないかとか、目をちゃんと開いているだろうかとかいろいろ気になることがたくさんある。

両眼とも0なので、目を開けているか閉じているかはまぶたの動きによって判断するしかない。目を開けてくださいよと言われておもしろい開いたら、びっくりしたような顔になっていたようだ。目を閉じていても、自分の存在感が主張できるのならそれに越したことはない。

ぼくにとってつむるとは、まぶたの動きによって外界のノイズを適度にキャンセルし、深く内面に集中するためのリラクゼーションなのだろうと思う。

光島 貴之 / 美術家・鍼灸師

目をつむる写真がつなぐもの

つながりは成実さんと井上との出会い以前に起きていた。今年度初めてとある方と知り合い、その方が紫野授産所を成実さんにご紹介くださった。そんな奇跡的なつながりから、「目をつむる」ご利用者の写真を撮影する、あるいはお互いに写真を撮り合うという取り組みは始まる。

「プログラムが事業所の中でどんな風に展開するのか?」「ご利用者はどんな表情をするのか?」「それ以前に『目をつむって』と声をかけてみなさんつむってくれるのか?」など、撮影当日までいろいろなことを考えていた。

撮影当日、過ごし慣れた食堂にスタジオが設営され、ご利用者同士がモデルやフォトグラファーとなり、次々とカメラに写真が保存されていく。日頃、活動記録として写真撮影することがあっても、自らがモデルとなることはほとんどない。目を閉じて穏やかな表情を浮かべる人、つむることに全身を集中する人、神秘的な顔、ポーズを決める、なんだか吹き出してしまうなど、その人らしさが表れていた。

写真展を見に行った。そこには、あの日授産所で目のあたりにしたのと同じような、多くの市民の表情が展示されていた。「つむるつながる」の意味がそこにはあった。立場や事情は違っていても、「目をつむる」という共通項で被写体同士がつながる。

「人はそれぞれ違って当たり前。だって目をつむる顔もみんな色々だもん」写真と向き合うことでそんなことを感じる仕組みになっていた。お互い違いを認めあう気持ちは何かでつながることで広がっていくのだと、たくさんの表情が気づかせてくれた。そこから自分の仕事の意味を問い直そうと思う。

井上 裕希 / 京都市紫野障害者授産所 所長

写真展を見つめて

寒い季節の中、開催に関わられたスタッフの皆様、並びに快く撮影をお受けいただいた地域の皆様に心より御礼申し上げます。

成実さんと初めてお会いしたのは2017年夏の頃でした。事務局から商店街事務所で写真展を開催したい方からメールが届いたとの事で、お話を聞いてみる事にしました。山科、静岡で開催された写真展のフライヤーを見せていただき、モノクロで写ってる人達の写真が全てフラットな印象で、何故か心に安らぎを感じました。と言う事で何かと業務の多い事務局に多少の負担は掛かるでしょうが、その所は少し目をツムル事にして商店街事務所で開催をお受けしました。会場では終日穏やかな雰囲気にも包まれた空間の中、顔を寄せて写真を見つめる人たちが賑わい、そして無事最終日を迎えました。

写真展が終わった日曜の朝、商店街の白木蓮の花のツボミも少し膨らみ、何故かこの街の空気も少し膨らんだ様に感じました・・・。
もうすぐ春です。さて成実さん、次はどの街で人と人とのツナガリを見つめに行くのですか？

それでは又会う日まで。

中村 孝／新大宮商店街振興組合 理事長

つながりの種まき

「また何かいい予感がするな」。

成実さんに今回のイベントの内容を詳しくお聞きした時にそう思ったことを覚えています。私は近くにある社会福祉法人の高齢者施設の職員で、利用者さんとは、いつものように地域の商店街に遊びに行くという感覚で参加しました。

利用者さんは自ら写真を撮ることに対して「うまくできるかな?」「私はできひん」と言っておられましたが、写真の撮り方を教わりながら、利用者さんどうし写真を撮り合う中で最後には「よう分からんけど上手かったわ」「できるもんやな」とニコッと笑われ皆さん楽しませていました。

今回の「つむるつながる」写真展では、延べ30名を超える利用者さんと職員が、写真を撮ったり、写真展を見に行ったりと参加させていただきました。商店街や地域の方たちと利用者さんが写真を通して関わりを持つことができ、これからの利用者さんの生活の中で「つながりの種まき」のきっかけになったのではないかと考えています。ありがとうございました。

片山 大海／地域密着型総合ケアセンターきたおおじ サブマネージャー

新大宮商店街3939

【出会い～ヤマシナポートレート】2014年12月、やましな GoGoカフェで成実さんと出会い、ヤマシナポートレートを知る。2015年2月、めをつむる写真展を体感。めをつむるのに、みんな微笑んでいる？

【めをつむる写真展が新大宮商店街に来る!】2017年10月、NPO 法人サリュさんの15周年記念の大切なメモリアルデーに、成実さんと久々の再会。新大宮商店街にて、“めをつむる写真展”の開催を知る!!

【出会いの環がつながる】2017年11月、鳳徳学区のワークショップ(北区まちづくりアドバイザーの西原さんとのご縁より)、12月ほくとく寄席(ほくとく寄席の久馬さんとのご縁より)に参加されたみなさんに、めをつむって頂きました。京都六大学落研の学生さんのパワフルショットと今年最後の笑い納め。

【出会い～たわわりんごの木が実るよう♪】新大宮商店街につながりのある山本博さんとのご縁より、12月全国高校駅伝の日にサンケイデザインさんによるおぜんざいおふるまいの中めをつむって頂き、ポスターやブログでも応援頂きました。

めをつむる写真展を通して、同じ時間を共有できたことに厚く感謝します。このまちを一緒にお散歩して、優しい♡をみつけましょう。

寺川 公美子／新大宮商店街のファン

パブリシティ

新聞：

- 『リビング京都新聞』 2018年2月3日
- 『京都新聞朝刊』 2018年2月17日
- 『朝日新聞朝刊』 2018年2月24日

ラジオ：

- 『FM87.0 RADIO MIX KYOTO あべきた放送局』(NPO 法人スウィング木ノ戸昌幸氏と成実憲一による対談) 2017年12月22日
- 『FM87.0 RADIO MIX KYOTO KYOTO RIVERSIDE WALK 火曜日』 2018年2月13日
- 『FM87.0 RADIO MIX KYOTO KYOTO RIVERSIDE WALK 火曜日』 2018年2月22日



『FM87.0 RADIO MIX KYOTO あべきた放送局』2017年12月22日



『リビング京都新聞』2018年2月3日



『朝日新聞朝刊』 2018年2月24日



『京都新聞朝刊』2018年2月17日

あとがき

「めをつむる」。

わたしは、最近よくこの言葉を口にします。仕事でも、プライベートでも……。

つつい人の悪い面にめがいきがちなのですが、ときにはめをつむりながら、寛容のある人間関係が築けたら素敵だなあ。

ところで、日本は 2025年には国民の3人に1人が65歳以上、5人に1人が75歳以上という、かつて経験したことのない「超・超高齢社会」を迎えます。今まで以上に多様な人たちが地域のなかで共に過ごすことになるかもしれません。時には立ち止まって、深呼吸し、めをつむってみませんか？ 次はみなさまの街で共にめをつむるかもしれません。(成実憲一)



鳳徳学区まちづくりビジョン策定ワークショップ／鳳徳会館
2017年11月18日

ラジオミックス京都「秋の交流会」／TAMARIBA
2017年11月25日



展覧会

めをつむる写真展「つむるつながる」

会 期： 2018年2月13日ー2月24日

会 場： 新大宮商店街事務所

撮 影： 成実憲一／藤田愛子／めをつむるスタジオ／ほか

ショートストーリー&めをつむるおみくじ： 小西秀和

主 催： ヴァリアス・コネクションズ

助 成： 平成29年度 京都府商店街アイデア実現プロジェクト事業

協 力： 京都府商店街創生センター／北区地域力推進室／新大宮商店街振興組合／高齢者福祉施設紫野／地域密着型総合ケアセンターきたおおじ／

京都市紫野障害者授産所／そらいろチルドレン／株式会社八清／株式会社フラットエージェンシー／サンケイデザイン株式会社／

あべきた編集部／玉林院たつのこおもちゃライブラリー／佛敎大学放送局／ほうとく寄席実行委員会／FM87.0 RADIO MIX KYOTO／

宇野基子／木下幹雄／小井香欧里／坂口聡／山本博 （順不同）

後 援： 京都市／京都市教育委員会／京都府社会福祉協議会／京都市北区社会福祉協議会／京都新聞社会福祉事業団

記録集

「つむるつながる」

発行日： 2018年3月29日

編集・デザイン： 企画者一同

発 行： ヴァリアス・コネクションズ

あなたは、めをつむって何を想いますか？